

I. 導入

おはようございます。今朝はまず、前回の使徒言行録のメッセージでもに学んだことを振り返ってみましょう。前回、すばらしい信仰者であり、教会史初の殉教者となったステファノの話を読みました。**使徒 6:8**にはこうあります。「さて、ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた。」ステファノは、日々の食事の分配を任された7人のひとりでした。ですから、彼は教会の最初の執事と考えられています。同時に、ステファノは、力強い説教者であり、奇跡を行う者でもありました。



ステファノは良いことをしていただけなのに、彼をねたましく思うユダヤ教徒が出てきて、彼を最高法院に引いていきました。そこで彼らは、証人を立てて偽証させ、ありもしない罪でステファノに有罪判決を下そうとしました。それでも、ステファノは真理のみを語りました。彼が語る真実は、本当に間違っているのが誰かを明らかにしました。それは、彼に罪を着せようとする人々、そして最高法院です。こうして、判決を下す側であるべき最高法院が、告発される側になりました。彼らはこのことに憤慨し、暴力的な手段に出ました。無実のステファノを都の外に引きずり出し、石打ちにしたのです。



ステファノは、死に際しても愛とあわれみの姿勢を示しました。これは、まるで主イエスの姿のようです。**使徒 7:59-60**「**6:8 7:59** 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。**7:60** それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。」ステファノは教会史初の殉教者となり、天国に迎え入れられました。

ところで、最高法院をここまで怒らせるとは、ステファノはいったい何を語ったのでしょうか。おおまかには、イスラエルの歴史をたどり、彼らも彼らの先祖もみな罪人だと宣言したのです。これは真実です。しかし、誰も受け入れたくない真実でしたから、人々を怒らせてしまいました。ステファノの言葉は、あまりに単刀直入で厳しいものでした。だからといって、無益ではありません。厳しい言葉こそ、私たちが悔い改めるのに必要なものだという場合もあります。ですから、そこにいた人々の中には、後に悔い改め、イエスを信じる信仰によって救われた人もいました。

では、ステファノが何を語ったのか見てみましょう。ステファノが最高法院に語ったメッセージを3つに分けて見ていき、旧約聖書の歴史を同時に振り返る機会としたいと思います。今日は、ステファノのメッセージの冒頭三分の一を見ていきます。使徒 7:1-16

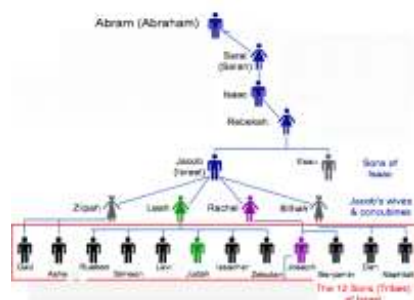
II. 聖書朗読 使徒言行録 7:1-16, (新共同訳)

7:1 大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。 7:2 そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、7:3 『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。 7:4 それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、7:5 そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』

と約束なされたのです。7:6 神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』7:7 更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』7:8 そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。7:9 この族長たちはヨセフをねたんで、エジプトへ売ってしまいました。しかし、神はヨセフを離れず、7:10 あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体をつかさどる大臣に任命したのです。7:11 ところが、エジプトとカナンの全土に飢饉が起こり、大きな苦難が襲い、わたしたちの先祖は食糧を手に入れることができなくなりました。7:12 ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まずわたしたちの先祖をそこへ行かせました。7:13 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分の身の上を明かし、ファラオもヨセフの一族のことを知りました。7:14 そこで、ヨセフは人を遣わして、父ヤコブと七十五人の親族一同を呼び寄せました。7:15 ヤコブはエジプトに下って行き、やがて彼もわたしたちの先祖も死んで、7:16 シケムに移され、かつてアブラハムがシケムでハモルの子らから、幾らかの金で買っておいだ墓に葬られました。

III. 教え

ステファノのメッセージの最初の部分では、イスラエルの家系の歴史をおおまかに振り返っています。この家系図の中心には神によってイスラエルと改名されたヤコブの名があります。イスラエル人は、イスラエルという名の人の子孫であることを改めて確認しましょう。イスラエルの家系について考えるとき、私たちはイスラエルの父イサクや祖父アブラハムと彼らの妻たちのことがまず頭に浮かぶのではないのでしょうか。また、イスラエルの12人の息子たちとその妻たちのことを考えます。彼らはイスラエルの12部族の族長です。このメッセージの中で、ステファノは彼らのことも挙げていますが、とくにアブラハムとヨセフに焦点を絞っています。私たちが今日のところはそうしていきましょう。



その前に、ユダのことを考えてみましょう。「ユダヤ人」という言葉は、ユダの名前が由来で、ユダの子孫という意味です。イスラエルの民を指して「ユダヤ人」と呼ぶようになりましたが、言葉の由来を知っておくのも重要なことです。

イエスの母マリアと育ての父ヨセフは、二人ともユダ族の人です。ですから、イエスの呼び名として使われている「ユダ族から出た獅子」は、預言的な称号です。この称号は、**黙示録 5:5** で使われています。**黙示録 5:5** 「すると、長老の一人がわたしに言った。『泣くな。見よ。ユダ族から出た獅子、ダビデのひこばえが勝利を得たので、七つの封印を開いて、その巻物を開くことができる。』」この世は悩みでいっぱいです。けれども泣かないでください。ユダ族から出た獅子であるイエスが罪と死に打ち勝ってくださいましたからです。アーメン！



私たちは、ユダヤ人が神の選民だと考えます。しかし、ユダヤ人を選民と呼ぶと、神が天から地上を見下ろして、いろいろな人の中からユダヤ人をご自身の民として選ばれたという印象を与えてしまいます。実際は、そういうことではありません。神が選ばれたのはひとりの人です。それは、信仰の人アブラムでした。神はアブラムを選び、アブラハムという新しい名をお与えになりました。そして、彼をとおしてユダヤ人を生み出されたのです。



神がアブラハムを選ばれたのは、アブラハムに信仰があったからです。ローマ 4:3 「聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります。」アブラハムは完璧な人ではありませんでした。聖書には、アブラハムの罪がいくつも記されています。しかし、彼には大きな強みがありました。それは、神を信じていたことです。

世間一般では、表向きが重要視されるあまり、正しい行いをしている限りどんな信条を持っていようが関係ないと思われがちです。しかし、神は心を見られます。ジョセフ牧師は先週そのことについて話され、ヨハネ 6:28-29 を引用されました。皆さん、覚えていますか。イエスは群衆に向かってこのように語られました。「6:28 そこで彼らが、『神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか』と言うと、6:29 イエスは答えて言われた。『神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。』」神はイエスを私たちの主であり救い主となるように送っていただきました。イエスの名を信じる人はすべて救われるのです。

主はアブラハムに何度も語られ、アブラハムは神を信じました。創世記 12:1-3 を見てみましょう。「12:1 主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。 12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。 12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。』」まだその当時アブラムと呼ばれていたアブラハムは、神を信じ、故郷を離れて知らない土地に行きました。これこそ信仰です。

すると、主は信仰の人アブラハムに「地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」という、驚くべき約束を与えていただきました。これはなんとも大きな約束です。アブラハムはひとりの人に過ぎません。けれども、神は、地上の氏族はすべて、つまり、国民、種族、民族、言葉の違う民がアブラハムをとおして祝福されると約束されたのです。ここに旧約聖書を読み解く重要なカギがあります。主はアブラハムを選び、祝福されました。しかし、そこには人々を祝福するというさらに大きな目的があったのです。

では、アブラハムを祝福の源とするという主の約束はどういう意味でしょう。それは、ユダ族から出た獅子、イエスが、アブラハムの子孫をとおして来られることを語っておられたのです。アブラハムの話には、イエスの来臨に関する預言的な啓示が他にもたくさんあります。

もっとも衝撃的な啓示は、息子イサクを全焼のいけにえとして捧げるように神がアブラハムに言われた場面です。これはアブラハムの信仰を容赦なく試すものでした。それでも、アブラハムには大丈夫だという確信がありました。そこには手がかりがありましたが、まず、聖書の神がそのようなことを要求された前例がなかったことです。このような要求は、神のご性質に反します。異教の偶像の神々は、人間のいけにえを要求しましたが、創造主なる神がそんなことを要求されることはありませんでした。次に、イサクをとおして子孫が与えられると、神はアブラハムに約束しておられました。そして、神は必ず約束を守ってくださるお方だからです。

ヘブライ 11:19 はこう語ります。「アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。」大丈夫だという確信があったにせよ、これがアブラハムにとって非常にストレスを感じる試練だったことには変わりはありません。御使いが来てアブラハムを止め、茂みに引っかかっている雄羊を代わりにささげるよう言ったときは、アブラハムはほっと胸をなでおろしたことでしょう。



創世記 22 章に登場するアブラハムとイサクの話は、初めて読む人にはショッキングな内容です。けれども、注意深く学んでいくと、はっきりしてくることがあります。それは、イエスと十字架につい

て物語る預言的な劇をアブラハムとイサクが演じていることです。アブラハムとイサクの話が映し出しているのは、この世の罪の代価を支払うためにイエスがご自身をささげられたときに、引き裂かれた父なる神の心です。イエスは、ご自身の命を私たちの身代わりにささげ、この世の罪を取り去る神の小羊となりました。そして、三日目にイエスは死からよみがえられました。

ステファノが最高法院に立ってメッセージを語った際、イスラエルの家系に属する人について語りましたが、アブラハムの他にヨセフについても多くを語りました。使徒 7:8「そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。」これは、イスラエルと改名されたヤコブであり、その 12 人の息子たちがイスラエルの 12 部族の族長となりました。ヨセフはそのひとりでしたが、父の寵愛を受けていました。

ヨセフは成長するとともに、預言の夢を見るようになりました。たとえば、創世記 37:9 にはこうあります。「ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。『わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。』」この夢は、ヨセフの父母と 11 人の兄弟が彼の前にひれ伏していることを象徴しています。それで、ヨセフの兄たちは嫉妬と怒りに燃えました。そして、チャンスを見つけてヨセフを厄介払いすることにしました。



使徒 7:9a「この族長たちはヨセフをねたんで、エジプトへ売ってしまいました。」奴隷として売られたヨセフは、エジプトで幾多の苦勞を耐えました。無実の罪で投獄される経験もしました。けれども、彼はファラオの夢を解き明かし、釈放されて高い地位に引き上げられました。ファラオが見た夢とは、神からの預言の夢で、7 年の豊作の後に 7 年の飢饉がやってくることを予見するものでした。ファラオはヨセフの知恵に感心し、彼を国の責任者としました。豊作のうちに、飢饉に備えるためです。



使徒 7:9b-10「しかし、神はヨセフを離れず、7:10 あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体とをつかさどる大臣に任命したのです。」ヨセフは、豊作の 7 年間に相当な量の穀物を蓄えようとこつこつと準備を進めました。しかし、現在のイスラエルにあたるカナンなど他の地域ではそのような準備がなされていなかったため、人々はたいへんな苦しみに見舞われました。



細かいことは抜きにして、ヨセフの家族、つまり、ヨセフの父イスラエルと 11 人の兄弟、それぞれの妻や子どもたちは、最終的にエジプトに移り住み、ヨセフの前にひれ伏しました。夢の預言どおりです。

ヨセフは彼らに必要な物資を与えました。ですから、ヨセフは自分の家族とエジプト全土とを食料難から救ったのです。これがおおまかな話ですが、ヨセフが兄弟たちにどのような態度を取ったか見ていきたいと思えます。この兄たちは、ヨセフを馬鹿にし、いじめ、奴隷として売り飛ばした張本人です。創世記 45:4-5「45:4 ヨセフは兄弟たちに言った。『どうか、もっと近寄ってください。』兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。『わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。45:5 しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。』」

ヨセフは自分の実の兄らによって拒絶され、奴隷として売られました。奴隷として連れて行かれたエジプトでも、うそや裏切り、苦難が彼



を待ち受けていました。彼は、兄らの手によって苦しめられ、さらに、エジプト人の手によっても苦しめられました。しかし、みこころのときに神はヨセフをエジプト全地の指導者として引き上げてくださいました。このようにしてヨセフは、自分の兄弟にとっても、エジプト人にとっても、救世主となったのです。

あらゆる意味で、ヨセフはイエスの型です。すなわち、何世紀も後にイエス・キリストの人生に起こることを表わす預言的なモデルです。細かい違いはもちろんあるにせよ、偶然と呼ぶにはあまりにも類似点多すぎます。

IV. 結び

ステファノがメッセージを語り終える前に、直接非難の矛先を最高法院に向けています。そして、彼らは怒りに燃えて、ステファノを殺すという決断をします。しかし、今日の個所では、ステファノは旧約聖書を用いて彼らにキリストを説いています。とくに、アブラハムとヨセフの話には来たるべきメシア、主イエスについての預言的な要素がたくさん詰まっています。ステファノが最高法院の人々にわかってもらおうとしたのは、イエスが旧約聖書の預言を成就されたことや、イエスの生と死、そして復活において起こったことは、すべて何世紀も前に予見されていたということです。

私たちはどうでしょう。ここから私たちは何を学ぶことができるでしょうか。ここで明らかなのは、歴史を通して神の御手の導きといつくしみに満ちた摂理が働いていることです。それは、私たち皆に与えられています。神は、すべての人を気にかけてくださり、すべての人が救われることを望んでおられます。そのことは、すべての人がアブラハムをとおして祝福に入るという、主がアブラハムに語られた言葉にあらわれています。また、ヨセフの話では、自分を牢に閉じ込め酷使した赤の他人のエジプト人や、自分を奴隷として売り飛ばした兄たちをヨセフが救うところに、同じ真理が見られます。実に、主の恵みはすばらしいのです。

最後に、詩篇 100 篇で締めくくりたいと思います。「**100:1 【賛歌。感謝のために。】全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。 100:2 喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。 100:3 知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。 100:4 感謝の歌をうたって主の門に進み／賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。 100:5 主は恵み深く、慈しみはとこしえに／主の真実は代々に及ぶ。」**

V. 祈り